

『古今佐倉真佐子』にみる佐倉城

外山 信司

(佐倉市文化財審議会委員・千葉市立郷土博物館)

はじめに

- (1) 佐倉藩 …江戸時代、房総最大の藩。その支配の中心であった佐倉城と城下
- (2) 戦国時代、享徳の乱の過程で、15世紀後半に千葉氏が本拠を名字の地「千葉」から本佐倉城(酒々井町・佐倉市、国指定史跡)へ移して以来、下総の政治的中心となる
- (3) 慶長15年(1610)に小見川(香取市)から転封された土井利勝が、中世城郭としての本佐倉城に代わる近世城郭として佐倉城を築城(中世の鹿島城のあった地に)
- (4) 江戸の東に位置する要地佐倉には、老中などを務める有力な譜代大名が次々に藩主となる
土井→石川→松平(形原)→堀田→松平(大給)→太久保→戸田→稲葉→松平(大給)→堀田
- (5) 佐倉藩士の語る佐倉城と城下、人々の暮らしを伝える史料『古今佐倉真佐子』
城絵図の研究や発掘調査の成果と補い合うことで、江戸時代の佐倉城の姿がわかる

1 『古今佐倉真佐子』(ここんさくらまさご)とは

- (1) 佐倉藩主稲葉家の家臣、渡辺善右衛門守由(1701～62)の著
元禄15年(1702)～正徳2年(1712)、享保2年(1717)～同8年(1723)佐倉に住む
- (2) 江戸時代18世紀中頃の佐倉(佐倉城・城下町)と領内について、実際に暮らした藩士の眼からみた様子を活き活きと描く希有な書物。『淀古今真佐子』とペア(序文)
- (3) 宝暦3年(1753)以前の成立、約270年前の佐倉について詳細に記述、彩色された絵図「総州佐倉御府内之図」が付く…「府内は絵図と引合見ると、とくと合点する也。」
- (4) 佐倉藩主稲葉家とは
 - ①三代将軍徳川家光の乳母春日局と稲葉正成の子正勝が老中となる。堀田家も同族【系図】
 - ②正通(正往)、元禄14年(1701)越後国高田(新潟県上越市)から入封。正知は、享保8年(1723)に山城国淀(京都市伏見区)へ、稲葉家は淀で明治維新を迎える
- (5) 佐倉の姿が形作られた稲葉氏の時代 …領国を明確に意識
稲葉家家臣、磯辺昌言の著書『総葉概録』(歴史)、『佐倉風土記』(地誌)

2 『古今佐倉真佐子』のテキスト

- (1) 原本 …渡辺善右衛門の子孫が佐倉市へ寄贈、佐倉市指定文化財、平成28年(2016)に修復
- (2) 『日本庶民生活史料集成 第8巻 見聞記』(三一書房、1969)に平山敏治郎氏(民俗学)が、『淀古今真佐子』とともに翻刻、解説
- (3) 佐倉では3回にわたり翻刻、佐倉市史編さん委員会編『佐倉市史料 第二集 古今佐倉真佐子』(1983、青柳嘉忠氏が担当)として普及
- (4) 決定版テキストとして、佐倉市史編さん委員会・佐倉市編『佐倉市史料叢書 古今佐倉真佐子』(2017、放送大学千葉学習センター菅原ゼミ(菅原憲二)の翻刻)・付図「総州佐倉御府内之図」が刊行される …原本に忠実な翻刻、今回もこれを使用。正確で読みやすいテキストを

3 『古今佐倉真佐子』にみる佐倉城

- (1) 佐倉城下城くわく(城郭)の趣
 - ①城の立地 …「後堅固の城」「城の後大キ成ふけにて深サ何程有か不知」「東向追手也」
 - ②本丸 …天守・銅櫓・三重櫓・屋形・一ノ門・不明門
空堀「はまるといのちがけのから堀也」
「聖なる空間」としての城郭「本丸ハ 権現公御腰かけさせられし故恐レて代々城主本丸住宅をせざる也」
一ノ門「見付にて」「不残かわらぶきしゃちほこ有之、平日小役人番をする」
 - ③帯曲輪・水堀
 - ④二之丸 …藩主の住む場、政庁として
城米蔵・たいめん所「城主帰城の節参府迄此たいめん所ニ住ス」・目付べや
二ノ門「見附にて二階門かわらふきしゃちほこ付」「士番也」
武器・武具の倉庫としての天守・門

(2) 三之丸一曲輪之趣

- ①台所・三ノ門「見附にて二階門かわらぶき門下足輕番」
- ②藩主(万祥院、稲葉正知)の火事見舞い
- ③稲葉大右衛門屋敷 …海隣寺墓地に墓碑あり
- ④浅間社「城のちんしゆにてせんけんの社也」
- ⑤小性(小姓)長屋・米蔵
- ⑥椎木門「見附にて二階門かわらぶきしやちほこある、門下足輕番付」
- ⑦角馬出「門のそと左右から堀まいの如し、門前土橋也、角馬出左右くいちがい土手向の方一めんに土手、各大土手にて芝附大杉並木也」

(3) 椎の木曲輪いちゑんに印

- ①あたこ坂 …愛宕社、別当圓正寺
- ②秋葉之社 …「うのくそ山」
- ③下屋敷書院 …「八九歳斗のかむろ前(毎)夜出ル」
- ④へび坂・杉坂・愛宕坂の怪異

(4) 根曲輪辺より七曲天神曲輪之趣

- ①あかす門「籠城の節の落口の門也」
- ②百疋立の厩・馬場・馬献上「野駒御拝領之節つなぐ小や場也」 …佐倉牧で放牧された馬
- ③田町かた町前「此辺ハ日光水出るル、ゆか上迄水付水あかりする也」・田町門(搦手)
- ④水花壇・臼田理兵衛屋敷脇の池「かわすがつせん(蛙合戦)」 …現菖蒲畑・姥ヶ池

(5) 天神曲輪より裏表広小路中下町大下町之趣

- ①天神社・別当大正院(大乘院)、稻荷社 …「堀田上野介殿きしんのかね也」
- ②広小路「佐倉大名小路也」
- ③追手門「見附にて二階門ハハ(か)わらぶきしやちほこ付ク、足輕番門下也」
- ④二重のやくら「時をうつ矢倉也、時ハつりかね也」「出火の節も(略)早かね打也」
…明治になると教安寺へ移され、太平洋戦争で供出される
- ⑤中下町・大下町 …佐倉東高校付近では、地下深くに城下町の遺構が良好に残る(『千葉県文化財センター調査報告書 第327集 佐倉市佐倉城跡 千葉県立佐倉東高等学校部室建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』1998)

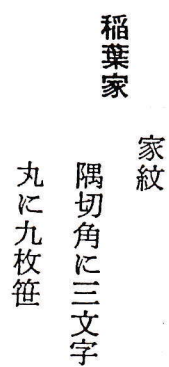
おわりに

- (1) 多く記された「魔所」と怪異現象・神仏・祭礼 …人工的な構築物・軍事施設でありながら「聖なる空間」でもあった城郭
- (2) 植物・動物・自然への関心 …人間を超えたものと共存していた江戸時代の人々
- (3) ひとりの藩士が佐倉城をどのように思い、どのように感じていたかを知ることができる

古今佐倉真佐子序文

誠に徒然成まゝにこしかた行末の事をかんか
見しに過にし事ハいつとなく昔物語に成ことのみ
いとなずかしく思ひはんべりし、折しも年久敷
住馴し所ハこきやうにひとしき思ひならめ、則
総州佐倉ハいわずとしれしへんびの事なか
らいにしへ思ひ出のこゝちせし折柄秋夕のい
と物あわれ成るハ秋の習にてありしか、その
かミ吉田のなにかしの庵に書捨たる事而已」
うかミしまゝに硯に向筆にいわせ心に
まかせそこはかとなく書つくせハいと面白事而已おふ
かんめれ、いともかしこくいにしへの事こそ今目前に有か如
一つの記と成し物をと、又過行末の楽とも成ぬる事を
思ひつゝけて山州淀の記をつゝり続て乾允の二
記と成しを古今真さこと号して他の国に至し
折しもハ昔を思ひ出の種ともならん物を」
2ウ

★印は佐倉藩主





(成田街道)

田町片町

(成田街道)

山崎村

水堀

田町門

水堀

水堀

田町

海隣寺坂へ

愛宕坂

愛宕神社

(成田街道)

鶴の糞山

根曲輪

(歴博)

椎木曲輪

杉坂

江戸口

水堀

馬場

七曲

稻荷社

鹿島橋

下屋敷

馬出

水花壇

天神社

不明門

馬献上

(姥ヶ池)

天神曲輪

椎木門

広小路ノ裏小路

二の丸

(暮らしの植物苑)

稲葉大右衛門 (佐倉中学校)

一ノ門

三ノ門

広小路 (佐倉東高)

天守

本丸

二ノ門

(連隊碑)

中下町

水堀

浅間社

大下町

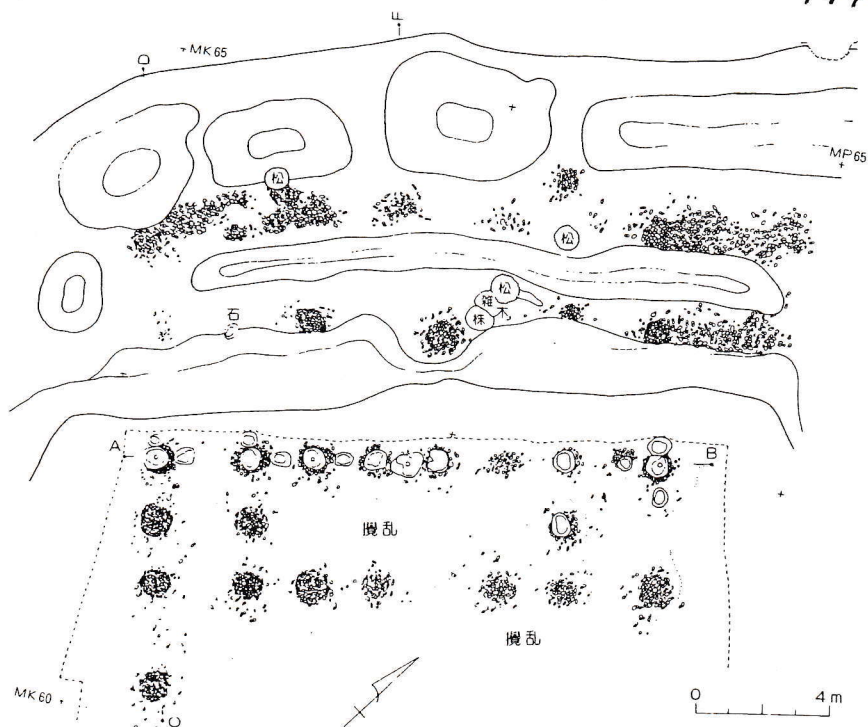
出丸

鷹匠町

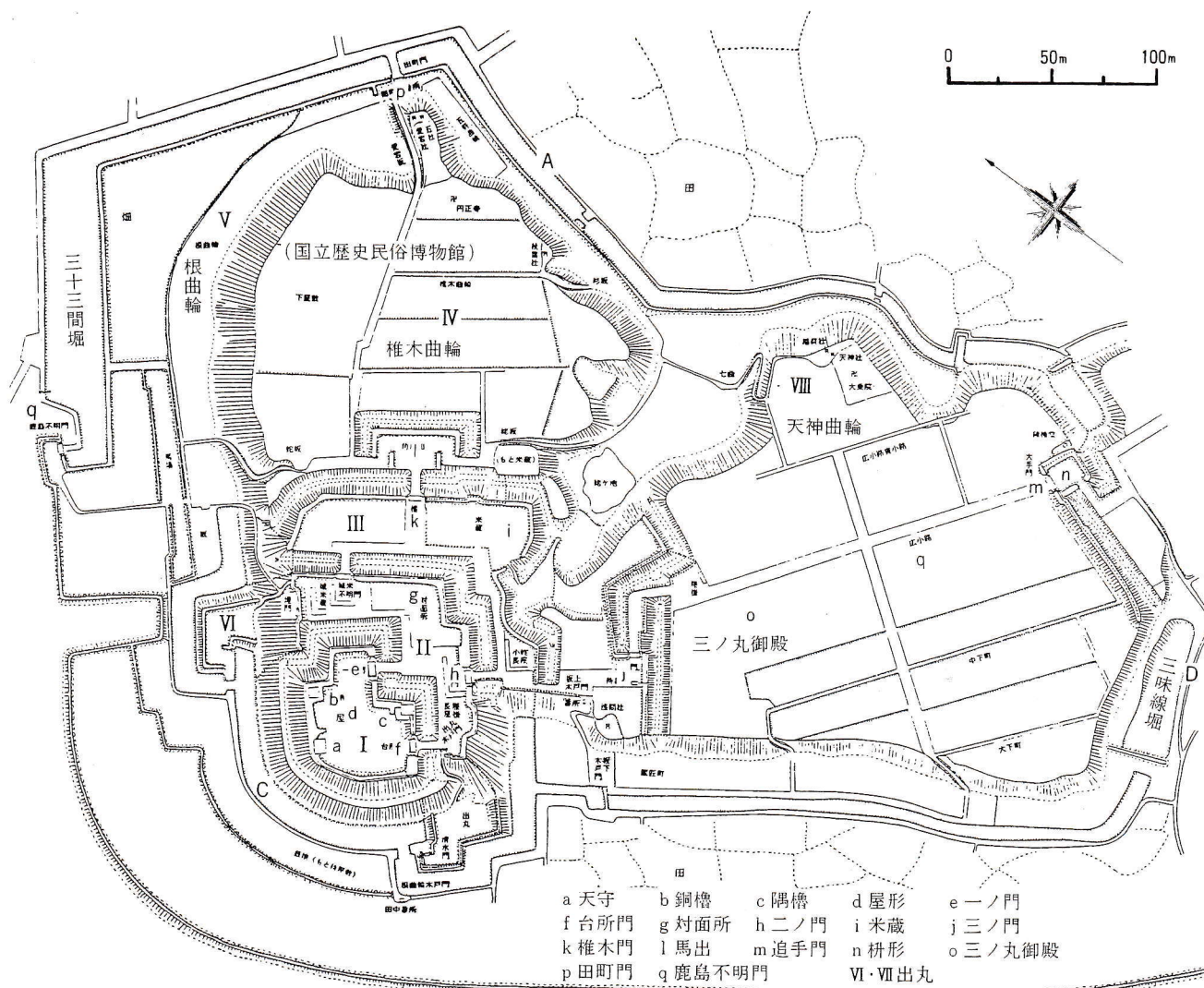
大聖院

(高崎川)

No. 4



天守閣礎石列平面図(『総州佐倉城—佐倉城本丸址調査概報—』より)



佐倉城概念図(高橋健一氏作成)

○佐倉城下城くわくの趣

当城ハ山城ニ而取わけ後堅固の城也、日本三城の内云伝ル、セめるとも
 たやすく落事ある間敷趣の名城也、城の後大キ成ふけにて深サ」^{3ウ}

何程有か不知、此ふけへはまるとあかる事一切不成、^(船)船の不及所也、南西北へ

取まきて大河有、則とね河の末也、東^{『の方』}●山^{『そ』}北^{『たい』}う●たいらにして流なし、則

東向追手也、天守四十也、一重御隠のよし也、三重に見ル、かわらぶき、本丸

の
 〔方〕より
 ●ふ富士南の角
 ●有之、
 〔に當りて〕
 又銅矢倉二重也、本丸の後西の方二有ル、金藏也、

不殘銅かわら也、三重の矢橋^{『櫓』}不殘かわらぶぎ也、本丸の前正南の方角二有ル、

天守共二以三ヶ所、天守と三重之矢倉ニハしやちほこ有之、高サ八尺余有之、

木に^{【て】}作り^{【たる】}●しやちほこ也、一とセ大風の時三重の方しちほこ吹落たる節某行て^{（や脱力）}
^{ツレカシ}

見しに『●』つまだて手を一ばいにあけてしやちほこの尾を見しに手よりハ

はるか尾上也、其後承合ルに八尺有之由、殊二『木を』ほりたるものにて佐倉の大工

共是をつくる也、本丸不殘こけら屋根也、佐倉
●ハ こけら屋根屋なし、修覆の

節者江戸
 〔来りてふく也、御座
 〕の
 間一間斗金ばり附さいしき絵、此外ハ皆
 〔カ〕

唐帟のはり付也、本丸関前不殘栗石也、此石の内二ぼうふり小紋

〔とあ〕
 〔〕られ小紋丁子小紋とちいさき栗
 ●〔石〕のうら
 ●〔と〕表にほりて有之、昔

【此石に】金をすりこミ敷たるよし申伝ル、佐倉御領地の時分迄此石」 4才

しかひろい取し故ニ御所替の時分ハ●まれニある事そかし、玄関の

前
□ ま東三階門有之、則見付にて一ノ門と号、不残かわらぶきしやちほこ

有之、平日小役人番をする、此外ソト方又見附有之、かわらふき

しやちほと付不明門と云て番人なし、しめ切也、此門の内少先二へいにて

仕切て入口へいに口有、此内東西長南北セまくばくの如し、此行当り

又へいありて口有、戸しめて有之、此口の内少地高二して天守也。

木丸(本)の東西南北へいにてかけ廻やねかハらこし坂白かゞさま切(狭間)て有之

又東の方より南北の方へいのそとから掘にて深サ三十間トヤサ二間ト掘て有

芝附て有之、あやまつて此堀のはたへ行ふミはつす上と一さし二二三三三

落也、急ニあかる事不叶、すてに准木門外ソトのかつ屈へ可奇所ニ去行

三男大之助遊二行てふミはつして落しかきせつて三の旦
(氣絶)

損して数日懸りて全快せしか強りたる女二あしの

にくひけて後二ハ筋青見へてあしき事也、是が二三花し、

是かもと二成しか
廿歳斗にして死ス、
ケ義成女はまる」と

本丸後山ぎし故屈なつ、
上^{カミ}今四二間下
二持付角

外一切不見、此下三十間上下二つの間に後刀形を削り、上名四五間下二帶曲輪として紐き道有

此三三三の門の後迄迄水堀也、是を見あくれば

『もののけ』
不印、水二く青ノミナリ
此堀の辺谷ニて有之故水堀也

此堀井主^{まん}うわばミ也、ひとゝセ松井七左衛門

● 行として此堀はた
● 行しに真中程にて大木の松木たをれありし故二

●すたきて通りし也 此堀はたゞ三間 ●道はゞを付て向の ●一めん二ま竹

此やふの内所にそとへ出ル道あり、そと畠也、又七左衛門同道を

● やふの内ふたをれありし故此男常ニかし

オツへをつきし故つへにてをかミ打ニ松木 ● 打けれハつへハ半^{ふたつ}折たるか俄 ●

オマコき出てさんじ堀へ入俄●高波をうたセ事のふすさまじき

〔七左衛門〕さん二宿へ帰りしばらくありて大熱来りて百日の余

たる也、則堀●主見ゆうハバミ也、外二見たる人なし、つねニ此道往来

□□ハなし、此堀ばた南^{〔南〕}方^{〔方〕}へ行て木戸ある、定番^{〔定番〕}の足輕也、居宅二

軒^{〔軒〕}介共二行てくらす也、扱此堀ばたを北の方^{〔北〕}へ行と堀留りて

□□^{〔長屋〕}の先^{〔先〕}堀有、則蓮池也、此堀のきわむむまなり、扱又^{〔扱又〕}5オ

□□一ノ門の外北の方^{〔外北〕}二階門有之、^{〔あかすにて有之〕}此外城米蔵有ル、

□□平日しめ切^{〔平日〕}留守居組番を勤ム、かぎ二ノ門上番所^{〔上番所〕}暮六時持来り

□□明六つ時二来りて請取行也、此門内^{〔門内〕}東の方一かまいやしきあり、たいめん

所と云也、城主帰城の節参府迄此たいめん所二住ス、本丸ハ 権現

公御腰かけせられし故恐れて代々城主本丸住宅をせざる也、此たいめん所二

表門南と富士南との間二向て有之、門の内右の方本丸の方へ向て広

間有之、さいぜんハ寄合衆と云て只今の並番の類へ寄合へ入りて

三人つ、昼夜番をス、暮時一人つ、天守^{〔天守〕}迄打廻り二行也、此外目付べや

有之て目付詰、御在城の節ハ人沢山二詰所^{〔詰所〕}へ詰しか留守の内ハ広

間と目付べや斗也、御殿中しめ切同前也、門の方長屋也、西の方へい斗二て

裏門有之、表長屋の先又へい成り、大書院^{〔大書院〕}庭也、もちの木二本斗

有之、不残^{〔不残〕}こけらぶき也、此長屋門の前向へかきの手二長^{〔手二長〕}ある、こしかけ

なり、こけら屋根也、此長^{〔長〕}下少地^{〔下少地〕}びく也、夫故此辺いしかき三方二

ある、此長や先少坂ありてたいめん所の表門まへ出ル、坂丸太のふせ木^{〔坂丸太のふせ木〕}5ウ

かきの手^{〔手〕}の長やの下東の方二ノ門有之、見附にて二階門かわらふきしや

ちほこ付、此門内二なかこ^{〔中〕}ろ九尺二四間の番所建て士番也、昼一人

夜二人つ、詰ル、是ハ下屋敷後二出来てたいめん所の番人下屋敷へ引、目付

べやも同様二引し故に二ノ門士番二成ル、夫迄ハ一曲輪そと三ノ門二番所ありて

勤しをこへ引く、大守御通之節ハ門の外へ昼夜共二罷出ル也、此番

又なかほと二俄二とこ付て門下足輕詰所の弓鉄炮上番所へ引てかざる也、又

所替^{〔所替〕}両年前^{〔両年前〕}三の門の番へ引て右の番所くつし取たる也、此門

のそと右の方ハ天守^{〔天守〕}水堀つゝき大き成がけ也、左の方へいかけまハし

そとから堀、留守居組番仕ル、門迄かきの手二ほりまして有ル、此両門入口

とばしにしてほらざる也、へいのやねかわらこし板白^{〔板白〕}かへさまある、城^{〔城〕}

内^{〔不残〕}白かべ也、年始五節句二留守之節ハ老中罷出諸士罷出ル、

年始ハ明七つ時^{〔明七つ時〕}五節句ハ明六つ時まいりかゝり二行て礼を申上ル

と退出する也、○天守^{〔天守〕}武具方役所不明門二階馬具方役所一ノ門

□□い弓方役所城米蔵脇の蔵鉄炮方役所也、扱城本丸の後前^{〔後前〕}6オ

□□大木の杉なミ木取わけ天守の後^{〔後〕}北の方^{〔北の方〕}不明門の脇迄ハ

□□二さいかち榎各大木数百本有之故極々深山の如^{〔如〕}にして漸く

表手^{〔表手〕}ハ余遠キ所^{〔所〕}天守の屋根少斗見ル也、右あらハせし分二て

本丸二ノ丸相済也、是^{〔是〕}末三ノ丸過て外四輪家中屋敷夫々^{〔夫々〕}あらす也、

※^{〔府〕}内絵図と引合見ルととくとかつてんする也 (中略)

○三之丸一曲輪之趣

二之門の外左の方小土手芝附ク、人のせいたけ位の松うへ^{〔松うへ〕}一めん二かりてたいらなり、此松

の本二つ割の竹やらい也、本丸二九三丸から堀共は凡二十間余、右松のな木^{〔な木〕}の下大がけ

□□^{〔二ノ丸〕}んに芝有りて天守下水堀江つゝく、此松なミ木向堀ばた小手土手芝附^{〔芝附〕}、此間

門^{〔門〕}二十間余、此向左右へ道有ル

左の方へ行て三ノ門へ出ル、門外左右屋敷右之^{〔右之〕}八太内蔵允屋敷、左^{〔左〕}金万定右衛門

屋、此屋敷前角門の内に

九尺二四間^斗、土番所、此内先の方一間たい所也、とこ付弓鉄炮飾ル、三ノ門見附にて二階かわら

ぶき門下足輕番、門の外左の方から堀にて内蔵允屋敷脇ニあたる、大杉並木^(木脱カ)を根

本竹やらい、右の方大土手芝附、此上大杉並根本竹やらい、此行^先かきの手ニから堀

杉並木有之、此堀留り内蔵允屋敷末と稲葉大右衛門屋敷とのさかいへ堀廻して

七曲^{マカリ}の坂下留メへ落ル、白田理兵衛脇^{ワキ}のため也、此留メ谷間也

八太内蔵允屋敷所替一兩年前二十月自火にて暮六半時出火にて夜半迄二

□間不残や^け、三ノ御門脇大杉へ火移りもへしを三本切^{故ス}外へ火移さる也、此節

万祥院君御在城故早束御供廻ヲ以御使成被下同夜拝領物ある也、夫々表長や

斗建て本家ハ不建、左近様へ相渡ス、其比三つ門へ二ノ門ヲ土番ひけて勤ム

金万定右衛門屋^敷脇内蔵允門のまん向へ二門有之、常のかぶき門、左右少へい、7才

此門よりそと大坂にて門のき^{ハカ}ふたまたの坂也、門を出左の方坂三間斗行てうへ二又門

有之、大木の松山ニてをくらし、此門の内木の鳥丹塗^(居脱カ)ニしてある、城のちんしゆにて

□んけんの社也、此山中ニ有ル、二間四角斗^方くすやの宮也、毎年六月朔日ニは

祭礼ニ御輿一つ御神前へ出ル、いつかたへも渡ル事^無也、別当勝蔵院神主宮越相馬装

束にて相詰終日罷在ル、山中へハ町が少斗くわしうりなんと出ル、金万定右衛門屋敷

□□毎年此日ニハひや麦ヲ大分こしらへ一門中をあつめて終日せんけん祭りと

云て遊事也、此社ハ常ニ行者一切なし、祭礼の日斗也、此社の前の坂を右の方へ

行ハ此山のすそを凡二丁斗の坂ヲ^をりると右の方鷹へや也、此下^(鷹匠)たかてう

町と云、末ニ記ス

扱二ノ門の前三の門へ行方向大土手芝附大杉並木の本竹やらい也、そのそと

から堀、此土手ニあたり二ノ門前が三ノ門の方不見、ますかたの趣也、此から堀^{ホリ}八木^太

内蔵允の書院脇が椎木の方へ堀廻して有之、二の門前左の方角

かぎのてに長屋有ル、小性長屋と号ス、一むね十四五間斗の長かぎの手ニ

有之、こけらぶきむなかわら白かべこし板ある、御在城の節ハ諸士并

かちの者手廻の者罷在ル長屋也、此前の二^斗門の堀ばた也、是を左の方へ

行て行当り竹の高やらいにて凡二十間斗をしまして有ル、入口の門二つ^(ハ脱カ)、

ある、一つ行当二有ル、一つハ折曲し先ニある、各かぶき門也、□内^此向三十間斗のく

すやの長屋つね^のかべ^{有之}、米蔵也、此蔵が家中へ飯米相渡ス、尤知行米

米不残是にて相渡ス、三斗二升俵にてこ^{ダカ}高と云物入て四斗二升俵也、四斗二升

俵を三斗式^(斗脱カ)升号して渡ル也、此上の升めハ知行米のよぶんの米也、蔵

日ニハ在馬出馬附にして家中へ渡ス故二俵三俵つ、一度^(斗脱カ)請取也、駄賃錢

相払也、三俵^(斗脱カ)附二十四銅^{又所ニ寄}、三十式銅也、扱此蔵が秋米在マ^ナ納ル時ハ馬にて道

切ルほとをひた、敷馬也、此蔵の内右の門の内す^斗れて大木の椎木一本

ある、地がまた付迄ハ手のとく位也、扱此方の門の向かぎの手ニから堀也、

城米蔵脇留守居組番する、門年始五節句ニハ開ク也、此門前左の角

留守居役屋敷長屋門づくり、安田勘左衛門住ス、此屋敷前左の方同役

屋敷にて熊本孫兵衛住ス、此屋敷前長角の角二間四方の番所くす

やぶきニして八太内蔵允田辺權太夫稲葉酒之允与力^{オウチヤ}昼夜一人つ、番をス、

此番所のきハ椎木門見附にて二階門かわらぶきしやちほこある、門下足輕

番也、門のそと左右から堀まいの如し、門^前土橋也、角馬出左右くいちが

い土手向の方一めんニ土手、各大土手にて芝附大杉並木也、是迄にて三ノ丸

分濟也、此椎木を出す、本丸^{是斗}が^斗迄ハ^斗所にて色々けうある也、左ニ印ス、^斗オ

一ノ門下足輕番之内が毎夜拍子木半時一時二打て天守下迄行也、夜半比がきわめ

て拍子木をくう中ふとられうつ事不叶、是故かわりの拍子木沢山門二有之、^{『平』}足輕二

小役者人加ル、あるい^{〔注〕}門を一さん大地へ打かへす音する、地ひ、け^{〔注〕}其節一切そとへ

不出事也、門ハたをれハセさる也、又留守居組番する門へハ寒夜之節ハ大猫三四疋

あつまり土器をくわい来りてすミを入火^{イレヒ}ををこしかわるくにしりをあふる事

すと也、此火消と何かたへか行て不見、番人すぎ見して居ル也、此門の向堀ばた二

五百目のから^{『か』}つゝ二挺雨たぎに^{〔注〕}して出て有之、扱夜ふけて通レハきわめて杉

並のゑた持て通ル人のあたまへ打付ル也、是^{〔注〕}かまハす通レハかわ事なし、

正五九月本丸にてたいハんにやてんとくあるとその夜あやしき事少もなし、

四月八月十二月三ヶ月共二月中末右大はん^{〔大般若転読〕}にやある前夜迄ハおひた、

く^{〔し〕}あれて難義する也、秋ハ夜中杉並木へかけす来りて色々成こへを

たて鳴ゆへに一入すごくあしき事也

○椎の木曲輪いちゑん^{〔注〕}印

^{馬出}扱角のそとから堀杉並木の根竹やらいなし、^{〔馬出凡西東二十間斗北南八九間斗二して〕}此馬出の内左の方へ

行は左の方から掘先迄有之、堀の向大杉並木根本竹やらい

熊木孫兵衛屋敷脇^{〔注〕}椎木門の左の方かこい也、此堀ばた行あたり杉坂^{〔注〕}坂

と云坂にて坂かぎの手二曲りてある、坂の長二丁余、此下根曲輪へ出ル、根曲輪

末二出ス、扱此坂左右大杉並木にてゑたと枝^{〔注〕}下にて行合しゆへ昼^{〔注〕}にてもくらし、

日のさす事なきゆへじめくして大^{〔注〕}しつ地也、此坂ま所也、扱前の道な

か程にて下屋敷^{〔注〕}をもて門前へ行、坂の方大書院庭のへいにて大杉其外

大木共庭二有之故へいの上うち山^{〔注〕}の如し、此下屋敷長凡三丁斗ひとむね

の長にて少かぎの手二通^{〔注〕}の方へ出はりて長屋あり、夫一丁斗又むねつゝき

あたこ坂也、長二丁余、左右大松大榎の類にて並木の如し、坂の右の

方あたこ山木立也、此坂ま所也、的場屋敷向がハあたこ別当圓正寺

也、真言宗大ひんち也、此門前坂の方あたこへの入口十間斗行て丹塗の

大鳥井有之、鳥井の内左の方あたこ、右の方五社也、両社とも二

くすや^{〔注〕}あたこの方二間四方斗五社の方同様也、鳥井十六七間

はと行て少高きゆへ両社の前二坂ある、長二間程丸キ石二てあかり

たんを付て有之、東西北の方大松にてはへしげる、南の方ハ別^{〔段〕}当の大竹やふにて有之

○愛宕^{〔注〕}ハかちう二て馬二召たるさいしき木像也、あたらしき也、御長ケ馬^{〔注〕}懸

二尺斗、五社ハ天照大神春日大明神鹿嶋大明神客仁大明神八幡大

菩薩此五社也、五社^{〔注〕}御長ケ三尺程宛之木像二而彫色各あた

らしき御像也、^{〔注〕}一年開有之拜ス、愛山ハ正軍地蔵也、両社之前松ノ木二

釘ヲ打テ有之、圓正寺^{〔折〕}氣念之上二而ヌケ^{〔注〕}ヌケザル也、一本二三本程つ、打テ

有之、ヤニ^{〔注〕}出テイヤナルナリ二成りテ有之、時々ウシノ時參有之也、此山

從東北西ノ方木立ノアイヨリ見渡セバ印西瀬戸飯野山之崎飯田村岩名

村辺一メン二見ル也

扱圓正寺の南隣小松了哲屋敷也、此屋敷の前左ノ方へ横小路有ル、

左右共二士屋敷、此行留杉坂也、長三丁斗左右ヨリ大松大松桜^{〔注〕}採

有之故空不見、昼^{〔注〕}にてもをぐらし、ま所也、此坂の上^{〔注〕}左の方鷹取

養雪屋^{〔注〕}にて大キ成松山也、左の方山下紋右衛門屋敷、此屋敷隣坂の

上秋葉之社有之、ホコラ也、此辺が愛宕山の辺迄大松並木二

かう^{〔か〕}けの魚沢山有之、此山下二留守居組長屋有之、是^{〔は〕}出て魚ヲ

ひろう也、此辺うのふんにて一めんに白ク雪中のことし、^{〔其頃〕}数^{〔百〕}のうとまるる故

かへしにて木かれかゝる故所替前由^{〔年頃〕}ことくく枝ヲ打たれはうとまりゑす

殊外うのなく音やかましき事也、いめうをうのくそ山と皆人よばはる也、

又小松屋敷前^{〔は〕}椎木門の方行て河崎新五兵衛屋敷前^{〔は〕}左の方へ行ハ

横小路也、左右土屋敷、河崎屋敷向荻山平次兵衛屋敷也、此屋敷の脇椎木

門馬出のから堀也、前ハ下屋敷表門前也、扱此横小路末にて右の方まかりて又横小

路、右ハ内田義太夫屋敷、左ハ松原五左衛門屋敷、此横小路末米藏の裏通りにて

椎木の右のかこの内也、大杉並根本竹やらいそとから堀、此所わけて深シ、

内田松原両屋敷の出はずれ^{〔は〕}右へ行ハ馬出の内へ入、左へ行て五左衛門門前へ

行、是^{〔は〕}二丁斗の坂也、松原屋敷の方大松山、右の方大杉並^{〔木〕}にて

し^{〔り〕}て有之、此下七曲谷末ニ出ス、此辺坂共ま所の趣如左

○下屋敷書院八九歳斗のかむろ前夜出ル、遊迄^{〔アツク〕}にてせうけなす事なし、書院の角杉^{〔戸〕}

の絵なり、平ふりわ^{〔は〕}髪^{〔け〕}のこく古ルき絵也、此絵をのれとはなれ出遊よし、あるく

あし音ハ某も宿番の節一夜承ル、人のあるかことし、又広間のゑんへはたのき来りてはら

つゝ^{〔脱カ〕}をもうつ、その音はん^{〔き〕}こへる也、その分にてせうけなす事なし^{〔10オ〕}

○へび坂夜ふけて杉の上にて大勢の声ニてきやりの音する、又ある時長谷川金右衛門と

に住しか椎木の家中屋敷へ夜咄^{〔に〕}来りしんかうニ及此坂を通しに陸地を行と思ひ

し^{〔が〕}、いつとなく杉の木のうち迄引あけられし故心付わひ事申たれハ陸地へいつとな^{〔く〕}

をちつきし故夫^{〔に〕}一さん^{〔に〕}かけ出宅へ帰り夫^{〔に〕}ふたゝび夜ふけて通ル事を止ル、

金右衛門直咄にて承ル

○杉坂夜ふけて此坂通れハ坂中二かなあみの如く成ルあみを張とうさる也

○愛宕坂夜毎に山^{〔は〕}砂落音さらくする也、昼ハ一切不落夜斗、又右金右衛門ある

夜此坂を通しにふところへ銭一文なけ^{〔ま脱カ〕}これたる也、その銭所持仕ル、常の寛永通宝の銭也、

又ある大晦日^{〔の〕}夜松井七左衛門歳暮二圓正寺来り初夜頃此堀ヲ通ル、雨天故傘をさし

坂なか迄をりしに上^{〔は〕}ころくと余程高キ音にてころがり来ルか折ふし七左衛門てうちん

無之、まつくら成りしか七左衛門両足の間へ右の物来りてはさまりある事^{〔脱カ〕}不叶故

傘をたゝみてゑの方にて力にまかせてつきたるニかんく音かしたる故かた手ニ而

いろ^{〔い〕}見ルに茶釜也、夫^{〔は〕}半時斗の間笠のゑにてつきやうくとあしはつれしゆへ

一さんニかけ出帰ル、笠ハみちんニ成不用、七左衛門直咄也、此外大嶋義右衛門なともうし

の時参^{〔カ〕}ニ出やいたるよし直咄にて承ル、^{〔と〕}角各天狗^{〔の〕}わざとあい見ル也、うかとしてハ

通がたし、成程夜ふけて通れバ山^{〔は〕}砂落空ハ不見、通ハなし、すぎき事條^{〔カ〕}

也、をり口へ行て見ルニ何レの坂にてまつくらにして一切先ハ不見

○根曲輪^{〔ネヅルツ〕}邊^{〔は〕}七曲天神曲輪之趣^{〔10ウ〕}

○根曲輪^{〔ネヅルツ〕}邊^{〔は〕}七曲天神曲輪之趣^{〔10ウ〕}

扱天守下水掘のはたを東の方へ行ハ畠有ル所へ出ル、左の方やふ木立なり、

あかす門二階門にて有之、是^{〔は〕}籠城の節の落口の門也、かわらぶきしやちほこ付

一切不明切番人なし、先年之大ちしんの節此門のしん木ねちれたる直て不直

宝永四(一七六七)東海・南海大地震 12/4

さる也、此門のそと河にてあしまこゆ^も□類一めん二はへ大竹太木うへご^み●●しし故通り

一切門不見、江戸口へ出ル道の方也、扱右の方厩にて百疋立の厩くすや^の●●長屋にて
あともねある、此後馬場也、右門の方を来レハ馬献上の脇へ出ル、馬^場●●東西へ長二丁南

北三軒斗^{間高}●土手芝付、此上むくけ垣也、馬献上くすやぶき二間二四五間斗、厩の内左の

方野駒御拝領之節つなぐ小や場也、厩の先蓮池、蓮沢山有之、此所にてかい葉ヲ

洗也、厩入口かぶき門、左右少へい板屋根、此門前を東の方凡五丁斗厩門を出、右

方山ぎハ上石彦左衛門屋敷、東隣月岡弥左衛門屋敷也、二軒共余程大屋敷にて玄関がまい

也、此屋敷脇を杉坂へある細道ある、夫を土屋敷五六軒ありて先稲葉酒之允与

□屋^敷●●ありて先●●大鳥孫右衛門屋敷ある、扱与力屋敷の前を長屋にて細工所にて小役

人の細工人とも住宅也、此長の向少、つ、島ありて一めんによぶ也、此そと水堀にて田

町かた町前也、此辺ハ日光水出ル、す^{ゆか上}上^{ゆか上}迄水付水あかりする也、大鳥屋敷□^の

前迄小役長屋ある、此前二くい違の土手芝付、土手上竹やらい、此そと右の方

愛宕坂へ行方向の方少先左の方田町門、かわらぶきにて大基成ル土階^{冠水}

本しの門しやちほこ附、門^前□土橋左右水堀也、川魚沢山すむ、門内右の^ハ

方愛宕ぎハ●●こけらぶき番所、町同心勤ル、兩人つゝ也、からめての門也(中略)

扱田町門番所の前向へ行ハ左の●●一めん二やぶ、右の方うのくそ山下、留守組

長屋前へまかりて出ル、此少先左の方杉坂の下へ出ル、養雪屋敷「ウラ」^ハ

山松山の下也、此まつ山の下を向へ行ハふたまたの道ある、右の方へ行てハ

水花^{竹がきの}此くたんも竹内杉並木二十間四方斗二して内一めん二谷也、じくくしてしめ

りある、青草芝の如し、真中二南北へ細長池ありて水ある、かきつばたあり、皆花

紫也、此池の上一めん二ふとう棚也、しつちゆへかふとうほこりかぬる、此前へを

行て左の方土屋敷三軒ある、水花たんだ屋敷出来の節できる、此きハ●●屋敷

村山陽左衛門^{隣一軒此隣白田理兵衛}●●屋敷也、向山下内を切こみて山下平兵衛屋敷一軒ある、此先ハ行留

松原五左衛門脇坂へ出ル、此坂左の方谷下二白田理兵衛屋敷脇の池二水ある、鮎沢山二

すむ、流なきため池故服事あしし、此池にてまいはる三月末二ハかわすがつせん

有之、数千疋のひき蛙あつまり左右へわかれて昼夜七日か程の内左右へ入違二

蛙共出くい合てを、いたるハ友の蛙セをい入ル也、水こくく泥水二成ル也、此蛙共六

外を集ルよし、此内ハ在辺二ひきかへる一切なし、此かつせん済と在々にかわすある

よし百性共咄にて承ル、扱くむさきものしかしめつらしき事故各見物たへ

すある也、人見居てもかまハす土くれをなけ入ても一切かまハざる也、名高蛙

かつせん也、扱もとの水花くたんの所を左の方へ行て此間一丁半斗、右角和田

治太夫屋^{敷脱カ}左の方細水ぞありて此向はた杉並木、此内三十間四方斗畠^{図では右衛門}

此向一めん二やぶ也、やぶのそと鍛作村也、和田屋敷前を大坂有ル、一丁斗あかりて

又左の方へ一丁ほどあがる也、へなち故雨天の節ハすへる也、下方坂^ハ

急也、此坂の上天神曲輪へ出ル、末二記、根曲輪を七曲辺相済、各谷間なり、

水花たんの辺ま所也、その趣如左

○夏目水右衛門椎木へ夜咄二行、夜ふけて帰ル時此所へ通懸しに折しもやみの

時成しに俄に日中のことくあかるく成しかしばくありて道も木立もかきの類も

光強成銀箔にてたミし如くにてそのひかり両眼へ入ていつかうあること不成ル故

水く□^ハんの辺を和田屋敷辺迄行て●●もとへ帰り数度二及大難義するによつて

則諸真言とうを念じしかしばくありてまつくらに成たるゆへ一さんに坂を

かけあかり帰たるよし水右衛門直咄にて承ル、此外二も余ほと出合たる者有ル

よし

○天神曲輪を裏表広小路中下町大下町辺之趣

七曲の坂上左の方へ少曲りて行と天神の社有、右の方角別当大正院〔圖では大乗院〕

真言宗の寺有之

○丹塗木の鳥井、此内右の方中杉並木、此向別当門前也、左の^{〔方〕}釣かね有之、

森崎団兵衛火事之節此辺迄せうしゆつゆへかねちのうへ^{〔焼失〕}丸太を置いて此上二置也、

大キ成ル釣かね也、堀田上野介^{〔堀田正信〕}殿^{〔殿〕}きしんのかね也、かねの銘二きり付て有之、此かね

所替有ルとりうずる惣鉢へ強あせをかきて不止ざるよし、上野介殿

つふれし時二ハ此かねのあせ強流、七曲へさして流たるよし申伝、則此^{〔此〕}12ウ

方様御所替の節罷越見たるに不殘あせをかきて手にてななるこゝろの

内一めんぬれたる也、つねハあせかく事一切なし、ふしき成かね也、此かねの少先へ

行と左右社^{〔社〕}ある、左の方社前へ出てある、一間四方斗の惣木ばめ屋根くずや

稲荷の社にて御神前二みす懸てある、此社の脇少先右の方同位の社ある、是ハ

天神也、御神前右二同、一年開帳の節拜ス二束^{〔ソノタイ〕}牀にて冠召たる下二御すハリ

たる二尺斗の黒め成石にてきさミ^{〔たろ〕}像也、杉並木根本細工竹やらいゆいて有ル、

別当天神の社の右の角にて門なく直二寺也、小屋懸の趣也

扱元の坂上天神へ行、角の所阿部幸右衛門屋敷向勘定場の内小役人長屋有ル、

此間一丁斗左の^{〔方〕}入角勘定場、^{〔又〕}右の^{〔方〕}三三斗の内上月源太兵衛屋敷ハ八太安兵衛

迄裏広小路也、源太兵衛屋敷前右の^{〔方脱力〕}塚田奎介、右の方屋敷脇左中嶋為右衛門

屋敷脇にて凡一丁斗行ば広小路へ出、又八太安兵衛屋敷少先右の方へ行ハ又一丁

目屋敷と屋敷の間也、こゝを通過レハ広小路へ出ル、広小路上の方三の門のそと左稲葉

大右衛門、塚田奎介屋敷、右の方角成田磯左衛門、後藤十兵衛、飯塚新五兵衛屋敷、成田屋敷脇

堀はたを右の方へ行ハ作事^{〔作〕}出ル也、扱奎介、新五兵衛屋敷脇天神曲輪を来ル四つ辻也、

右の方飯塚かと左武居五郎兵衛屋敷間一丁斗坂にて夫々行あたり大下町上野三郎左衛門
屋敷前へ出ル、鷹てう町へ行坂の上也、稲葉塚田成田後藤の屋敷品々大木之うへこミ也、
武居門前右の方二丁斗行と追手門前へ出、右瀧川新右衛門屋^{〔敷〕}に^{〔敷〕}て留ル、左の

方裏小路へ出ル、門の方杉原与一左衛門屋敷二留ル、是迄上長凡三四丁斗、各屋長屋^{〔敷〕}門へい

板やね白かへ作 万祥院殿^{〔御力〕}堀城御着之節と御参府の節大右衛門屋前^{〔敷〕}13オ

杉原屋敷少先迄片か^{〔敷〕}へ罷出ル御目見仕ル、夜中ハ左右屋敷^{〔敷〕}前高提灯

大知ハ二張小身ハ一張つ、年明迄立ルなり、大かた御参府の朝の事也、平日広小路ハ

惣鉢りつは成ル事也、佐倉大名小路也、扱瀧川屋敷脇右の方へ行ハ中下町の

末石崎助右衛門屋敷^{〔前〕}へ出ル、瀧川屋敷脇左の方一めん二土手芝付大木杉並木

木の根きわ竹やら^{〔脱力〕}此外から堀也、扱追手見附にて二階門ハハらぶきしやちほこ

付ク、足輕番門下也、門のそと十五間四方斗の升形土手をつき廻し大木

杉並木根本不殘竹やらい、左の方角升形をそとへ出してこけらぶき、二重

のやくらある、時をうつ矢倉也、時ハつりかね也、出火の節も此矢倉にて早かね

打也、升形右の方土橋へ出ル、向田辺権右衛門屋敷前也、升形の土手のそと時

の矢倉の下通迄から堀也、追手御門にハとばと大分住也、此外宮小路也、末二

出ス、扱中下町石崎の屋敷向牟礼弥太夫屋^{〔敷〕}也、此屋敷隣村山善右衛門屋敷也、

牟礼屋敷すくれて大竹藪也、両屋敷の間一丁半斗行と大下町末へ出ル、

此所屋敷の間村山屋敷ぢり樹木畠にて一めん二はちや柿沢山うへてある、

根本一めん二いちこうへてある也、入口木戸にて丸竹のかうし戸也、せうをろして置

也、扱牟礼屋敷前右三四丁斗左右土屋敷、此小路の行留り作事なり、

牟礼屋敷前凡三丁斗行と武居脇の坂下也、四つ辻也、是右左の方^{〔方〕}13ウ

へ行と上野三郎左衛門屋敷前右一丁半斗少、丸く廻りて行ハ右樹木畠の